

楫取魚彦自筆 土佐日記縣居説 (下)

凡 例

- 一、これは倉野憲司博士所蔵本を忠実に活字にうつしたものである。
- 一、この前半は既に第十号に掲げた。本号に掲げるものはその後半である。
- 一、前号の凡例にも示したごとく、本書については既に同博士が「文学」第八号（昭和七年一月）に解説して居られるので、ここでは解説を省く。（同博士著「上中古文学論攷」に所収。）
- 一、濁点・句読点は原文のままとした。
- 一、適宜段落を分けて、段落ごとに傍註・頭註を記した。
- 一、傍註は左右ともに（１）（２）（３）で示し、註者の意見は（ ）で囲んだ。
- 一、頭註は（イ）（ロ）（ハ）で示し、傍註の次に掲げた。頭註の記載箇所に関する註者の意見は同じく（ ）で囲んだ。
- 一、句間に多くの分註が施されてゐるが、便宜「」の中に一行に書き改めた。
- 一、分註・頭註の中の細註は（ ）の中に一行とした。
- 一、虫損の文字は□で示した。

（古田東朔）

十九日日あしければ船いださす、

廿日きのふのやうなれば船出さす、皆人々うれへなげく、くるしく心もとなければたゞ日のへぬる数を、けふいくか廿日卅日とかぞふれば、およびもそこなはれぬべし、

「および指也和名たひくかぞふるさま也空蟬巻におよひをかめてとをはたみそよそなとかそふれば云々」いとわびし、夜は(1)いもねす、「いは宿にあたりねは卧にあたりてねは手足をなよかにのへふすぬえふすと云意」はつかの月いでにけり、山のはもなくて海のなかよりぞ出くる、かやうなるをみてや、昔あべの仲まるといひける人は、もろこしにわたりてかへりきたるときに、船にのるべきところにて、かの国人うまのはなむけしわかれをしみて、かしこのから哥つくりなどしける、「安倍仲麻呂は元正天皇御宇靈龜二年八月に遣唐使大伴山守にしたかひて年十六歳にて入唐せりさてもろこしにとどまりて物まねひして才智高く成て名を改つゝ朝衡といへり唐帝其才を愛して官をもすゝめて秘書監に至りかさねて検校にうつり左補闕をへたりかくて年久しく有て日本にかへらんとしけるにこれ唐の玄宗の天宝十二年也統紀卅五云光仁天皇宝龜十年五月丙寅前ノ学生阿倍仲麻呂在唐而亡、家口偏乏、葬礼有闕勅賜東施一百匹白綿三百屯云々船にのるへき所にて古今集の注の詞にはめいしうと云所にてとあり明州也これひと度帰京せし時の事なるへしかしこのからうたつくりなと右丞王維仲麻呂をおくる別の詩に(有序略之)積水不可極 安ッ知シ滄海東 九乃何ッ処ス遠 万里若シ案レ空 向ハ国唯看日 帰帆但信風 鰲身映天黒 魚眼射波江

郷樹扶桑外 主人孤島中 別離方異域 音信若為通 秘書包佶

かおくる詩 上才生下国 東海是西隣 九詠蕃君使 千年聖主臣

野情偏得礼 本性太含真 錦帆乘風転 金装照地新 孤城開唇

閣 曉日上車輪 早議来朝蔵 塗山玉帛均 くに人こゝにてはく

にうとゝよむへきにや玉維包佶となるへし」あかすや有けん

廿日の夜の月出るまでそ有ける、その月は海よりぞ出ける、是を見てぞ仲まろのぬし、わかくにはかゝる哥をな

んかみよより神もよみたび、いまは上中下の人も、かや

うにわかれをしみ、悦もあり悲しみも有時にはよむとて

よめりける、「かみよより神もよみたひは詠給也」あをうなば

らふりさけ見ればかすがなるみかさの山に出し月かも、

とぞよめりける、「あまの原あをうなはらいにしへ二伝有しな

るへし此度は海にて次の哥にもよせにければ青海原を用しなら

ん」かの国人聞知まじう、おもほしたれども、ことの心を

をとこもじにさまをかき出して、そのことはつたへたる

人に云しらせければ、心をや聞えたりけん、いと思ひの

外になんめでける、「男文字女文字とて古へ別なし此比今様の

なたらかなる書様の有しを女もしとは俗にいへりと見ゆさて仲ま

ろは此哥意を漢文に書て見せける故によく通したるといふのみ通

事のいる事にあらす」もろこしと此国とは詞ことなる物なれ

ど、月の影は同じごととなるべければ、人の心も同じこと

にやあらん、さて今そのかみをおもひやりて、ある人の

よめる哥、

都にて山のはに見し月なれど波より出て浪にこそい

れ、「都にて山のはに見しと云所三笠山に出し月と云にあた
り波より出て波にこそいれと云は青海原ふりさけ見れはと云
より出たり」

(1) 夜は今本になし (2) 妙本かうやう (3) 妙本こ
れを見て仲まろ

(イ) 魚彦云源氏物語梅枝卷十二丁に女手を心に入てならひ
しきかりに云々

廿一日うの時ばかりに船出す、皆人々の舟いづ、是を見
れは、春の海に秋のこのはしもちれるやうにぞ有ける、
「このはしものしもは助詞なり船を一葉ともいへり」おぼろげの
ねがひによりてにやあらん、風もふかすよき日出きてこ
ぎゆく、「にやをにやはと見ては聞ゆる故なれとあらんの語いさ
ゝか穩ならすいはゝおほろけならぬ願に云々といふへし然とも源
氏にも此ことく書し所あり此此の俗にかくいひしか又今の俗によ
くく願によりてにやあらんと云に似たり猶考へし」此あひだ
につかはれんとてつきてくるわらはあり、それがうたふ
船哥、

なほこそ国の方は見やられる、我ちゝはゝ有としお
もへば、帰らや

とうたふぞあはれなる、「皆人は日よりを悦ふに此童は土左の
方をおもふ也かへらやはかへらばやの意也」かくうたふを聞つ
ゝこぎくるに、くろ鳥と云鳥、岩のうへにあつまりをり、
そのいはほのもとに浪しろく打よす、かちとりの云やう、
くろき鳥のもとに白き波をよするとぞいふ、此詞何とは

なけれども、ものいふやうにぞ聞えたる、人の程にあは
ねばとがむるなり、「(和名抄鵲(久呂止里) 黒色水鳥也云々阿
仏尼の記にいとしろき洲崎にくろき鳥のむれゐたるは鵜といふ鳥
也けり白浜にすみの色なるしまつ鳥筆のおよはゝゑにかきてまし
云々物云やうにとは語をあやにいふやうなるとなり」 かくいひ
つゝゆくに、ふな君なる人浪を見て、くによりはじめ
かいぞくむくいせんといふなる事をおもふうへに、海の
又恐しければかしらもしらげぬ、「此海賊土左辺にゐしを此
守追なとせし故に今かへるさはひそかにてかれはその報せんとい
ふなと風聞有しなるへし」なゝそぢやそぢは海に有る物なり
けり、「なゝそぢやそぢは海に有とは海賊と海との恐れによりて
七八十年の老の一時に吾身にきたる心ちする事を云也韋仲将か凌
雲の額を書し恐に白髪となりし事有」

わがかみの雪といそべの白波といづれまされりおきつ
嶋もり、

かちとりいへ、「万葉四八百日行浜のまさごも我恋にあにまさ
らめやおきつ嶋守と云意哥の詞にて沖つ嶋守とはいひたれと実は
かちとりにとふことにしなせりかくの如きしなし妙也」

(1) 今本いはのもと (2) 次に海の又恐ろしければと有
是也

(イ) 魚彦云源氏物語若な上におほろけにしめたるわか心か
らあさくもおもひなされす又椎本におほろけのよすかならて
人のことにうちなひき此山里をあくかれたまふな云々榮花物
語さまくの悦巻におほろげにおほす人にそいみしうしのひ

て物なともたまひける同初花巻におほろけにおもほせはこそかくものたまはすらめ云々

廿二日よべのとまりよりことゝまりをおひゆく、はるかに山見ゆ、年九つばかりなるをのわらは、年よりはをさなくぞある、此わらは船をこぐまゝに山もゆくと見ゆるを見て、あやしきこと、哥をぞよめる其哥、〔あやしき事かくの如くいひ切たる語物語ともに有也〕

こぎてゆく船にし見ればあし引の山さへゆくを松はしらすや、

とぞいへる、をさなきわらはのことにてはにつかはし、〔いせ物語にゐなか人のことにてはよしやあしやといへり〕けふ海あらげにて、磯に雪ふり波の花さけり、ある人のよめる〔風はつよからねど波のいと立をもてあらげと云なるへし〕波とのみひとへにきけど色見れば雪と花とにまがひけるかな、

(1) きのふの泊ならぬ泊也 (2) 句 (3) 今本て

(4) 是も波也

(イ) 神武紀に難波をいにしへ浪花ともいひし事あり

廿三日日てりてくもりぬ、此わたり海ぞくのおそりありといへば、神仏をいのる、〔しはし照て曇れるなるへしおそりは恐也古今の序にもいへり〕

廿四日きのふの同じ所也、

廿五日かちとりらの北風あしといへば船出さす、かいぞくおひくといふことたえすきこゆ、

廿六日誠にやあらん海賊おふといへば、夜中ばかりより船を出して、こぎくる道にたむけける所あり、かちとりしてぬさたいまつらするに、ぬさのひんがしへちれば、かちとりのまうしてたいまつることは、此ぬさのちるかたにみ船すみやかにこがしめ給へとまうしてたいまつる、是を聞て、〔万葉一百船能対馬乃渡り渡中爾幣取向而早還許年かくよめるは海神にぬさまつる也こゝもしかなりくか道にては引ものかみなとあり道祖はこゝの神にあらず〕めのわらはのよめる、

わたづみのちぶりの神にたむけするぬさのおひ風やま
すふかなん、

とそよめる、〔季吟抄に云ちぶりの神とは道を守る神也袖中抄にゆくもけふかへらんときも玉ほこのちぶりの神をいのれとそおもふ貫之顯昭云ちぶりの神とは道ふりの神といふにや又云隠岐の国にこそ知夫利崎と云所にわたすの宮といふ神はおはすなれ舟出すとはその神に奉幣してわたりをいのるとそ申すそれを本体にて海をも陸をも道を祈る神をちぶりの神と名付たるにやぬさのおひ風とはいま東へ風の吹は京の方へのおひ風なれば也真淵云道返神道主者など道を上略してちとのみいへはこゝは道触の神といふ意にや行道のへの神也さて貫之玉ほこのちぶりの神とよみしによるに陸道の神を海路にかりて云のみ〕此程に風よければかちとりいたくほこりて、船にほかけなどよろこぶ、その音を聞て、わらはもおきなもいつしかとおもへはにやあらんいたくよろこぶ、此中にあはちのたうめといふ人のよめ

る哥、「妙寿本おんなもいつしかとしおもへは云々おんなと有は
老女の事なればよし女はをんなと書也老女はおんななり淡路とい
ひける老女にやおくに淡路の巨子オホイッも同人なるへし」

おひ風のふきくる時はゆく船のほでうちてこそうれし
かりけれ、「物をよろこふ時は手鼓なと打ことを船の帆手を
うつにそへてよめり帆のよこ手に縄を多く付て右へ左りへひ
らかんとするつなをほでといへり」

とぞていけのことにつけつゝいへる、「天氣の事につけてい
へるの多かりし故にかく書るならんさなくては此詞益なし」

(1) 是の字今本なし (2) 今本あるわらは云々 (3)

今本ぬ (4) 今本も (5) 今本つけていのる

(イ) 神名式おきの国知夫利郡由良比女神社名神大之名和多
須神

廿七日風吹波あらければ舟いださす、これかれかしこく
なげく、「つよくなげく意にておそるゝ意にはあらずいせ物語其
外にも有ことは也おそるゝならはかしこくの下に必ことば有へき
なり」をとこたちのからうたに、日をのそめば都とほしな
どいふなることのさまを聞て、ある女のよめる哥、

日をだにもあま雲ちかく見るものを都へと思ふ道のは
るけき(2)「あま雲は天雲也日は遠き物なれとも目に見れば猶近
し都は目にも見えず海路をへたてたれば遠き事を歎く意也幼
童伝に晋明帝五六歳の比父の元帝日と長安とはいづれか遠き
ととひ給へるに日は近し長安は遠しとのたまへるに元帝その
故をとひ給へはレハ目ヲ則見ル日ヲ不見長安」とこたへ給

ひし心ばへとおなし哥也」
又ある人のよめる、

ふく風のたえぬかぎりしたちくれは波路はいとゞはる
けかりけり、「風もかぎりなきそらのはてより吹来りて波を
たたすれば波路のかきりもなしと云か猶考へし」

日ひとひ風やますつまはじきしてねぬ、「物をうとましく思
ふ時は弾指する也ツマハシキ空蟬巻につまはぎしハギをして恨給ふと云々ね
ぬは寝ぬる也」

(1) 妙本心なくさめに (2) さ

廿八日もすがら雨もやます、けさも、「雨も風もやまさり
しなるへし」

廿九日船出してゆく、うら／＼とてりてこぎゆく、「うら
／＼とは日の長閑なる也枕草紙に三月三日うら／＼とのとかにて
りたる云々」爪(1)いと長くなりたるを見て、日をかぞふれ
はけふは子の日なればきらす、「子の日の日の字すみてよむ
へし拾芥抄に丑の日は手の爪寅の日は足の爪きるよし也丑の日を
待にや」むつきなれば京の子の日の事いひ出て、小松(2)もが
なといへど、海なかなければかたしかし、「むつきとは人のゆ
きむつふ故にむつみ月といふ心にて睦月ムツキと云といひ来れり十節記
に正月子ノ日登岳遠望四方得陰陽静氣除煩惱之術也云々此国のな
らはしは野へに出て松引あそふ事と也かたしかしとは海中なれば
松も有難しとなり」ある女のかきていたせる哥、

おぼつかなけふはねのひかあまならば海松をだにひか
ましものを、

とぞいへる、「海松とかきてみるともよめは海人ならはみるを松になそらへても引かん物をそれたにせねはけふは子の日かもおほつかなしと也」海にて子の日の哥にてはいかゝあらん、「いかゝあらんはあしからじやとなり」又ある人のよめる哥、

けふなれどわかかなもつますかすがのゝわがこきわたる浦になければ、「正月七日を予の日とさためて若菜を用る

故にけふの子日にもわかなをよめるにや上月初子に松を引事と人日に若菜を調する事とその比混せしなるへし後撰にも同日に松引と菜つむ哥見ゆ文粹九云早春觀賜宴宮人同賦催粧庇製菅家聖主命二小臣二分三類史之次見有上月子日賜三菜羹之宴一野中笔ハ菜世事推ニ之惠心ニ鑑下和ハ羹俗人属ニ之菜指ニ云々又上陽子日に倚ニ松樹一以摩ハ腰習風霜之難犯也和菜羹而嚼レロニ期氣味之克調也といへり又春日野は専ら若菜にいへる所なればかくよめり古今集に春日のゝ飛火の野守出て見よ今いく日ありてわかなつみてん」

かくいひつゝこぎゆく、おもしろき所に船をよせて、こゝやいづことゝひければ、とさのとまりとぞいひける、昔土佐と云ける所に住ける女、此船にましれりけり、そがいひけらく、昔しばし有し所の名たぐひにそある、あはれといひてよめる哥、「妙寿本某いひけらく土佐の泊と云は阿波の国に有と或人いへりさて昔土佐と云所に住ける女といふは土佐国土左郡土佐の郷に住し女の此舟に在てよめるなるへし貫之の此国の守なるをおほめく故に書しと云はかなはす」

としころをすみし所の名にしおへばきよる浪をもあは

れとぞみる、

とぞいへる、「きよる波は万葉に來寄する波と云に同」

(1) 今本の長くなるを見て (2) 今本小の字なし (3) 今本あるの詞なく女かきていたせるとあり (4) 以下一本なし

(イ) 魚彦云万卷十九(四十八丁) 宇良宇良爾照流春日爾比婆理安我里情悲毛比登里志於母倍姿

卅日雨風吹す、かいそく⁽¹⁾よるありきせざなりと聞て、夜中ばかりに船を出してあはのみとをわたる、夜中なれば西ひんがしも見えす、男女からく神仏を⁽²⁾祈てみとをわたりぬ、「雨風吹すとは雨もふらす風も吹さる也」とらうの時斗にぬじまと云所をすぎて、たな⁽³⁾がはと云所をわたる、「奴島は名高き野島也古へ野をはぬといひしをその所には貫之の比にもいひ伝へしを聞て書し物也万葉に哥多し」⁽⁴⁾からくいそぎていづみのなだと云所に至りぬ「是より和泉国也」けふ海に波に似たる物なし、神仏のめぐみかうふれるにたり、けふ船にのりし日よりかぞふれば、みそかあまりこゝぬかになりけり、今はいづみの国にきぬれば海賊物ならず、

(1) は (2) 妙本田無河 (3) 今本かく

(イ) 京近ければ海賊の恐も物の数ならずと也前に和泉国迄たひらかにねかひたつといへり(此注物ならずの下に書へし)二月朔日あしたのま雨ふりうま時ばかりにやみぬれば、いつみのなだと云所よりいてゝこぎゆく、海のうへきのふのごとくに風波見えす、くろざきの松原をへてゆく、

所の名はくろく、松の色は青く、いその波は雪の如くに、かひの色はすはうにて、五色に今一色ぞたらぬ、此あひだにけふは⁽¹⁾はこの浦と云所よりつなで引てゆく、かくゆくあひだに人のよめる哥、「はこの浦和泉なるへし和名牽絞（豆奈天）挽^レ船^ヲ繩也云々」

玉くしげはこの浦波たゝぬ日は海を鏡とたれか見ざらん、「波たゝぬ海面の鏡の如く平らかなるを櫛^{クシダ}笥に鏡もそふ物なればとりあはせてよめり」

又船君のいはく、此月までなりぬることゝなげきて、くるしきにたへすして、人も云ことゝて心やりにいへる、ひく船のつな手の長き春の日をよそかいかまでわれはへにけり、「十二月廿一日より二月朔日迄四十五日なり」

聞人の思へるやうなそたゞことなるとひそかにいふへし船君のからくひねり出してよしとおもへることをえしもこそしひへ⁽²⁾とてつゝめきてやみぬ「しひは強也ひねり出しては前になひ出すといへるかことくいと出かたきをやうやうといひし也此哥はわざとかくたゞことによみてかくことはなせるのみ也貫之のよき哥にはあらす此所の注に定家の説になつみてよむとよむ哥皆よしとおもふはまたしき也」にはかに風波高ければとゞまりぬ

(1) 妙本篋 (2) め(とゝむへし)

二日雨風やます日ひとひよすがら神仏をいのる

三日海の上きのふのやうなれば船出さず風の吹ことやま

ねは岸の波たちかへる是につけてもよめるうた

をゝよりてかひなき物は落つもる涙の玉をぬかぬなり

けり

かくてけふは⁽¹⁾くれぬ

四日かち取けふは風雲のけしきはなはだあしといひて船出さすなりぬしかれともひねもすに波風たゝす此かち取は日もえはからぬかたる也けり「かたる伊せ物語にかたのおきなといひ大和物語にかたのやうなると侍るは共に乞食の事にて人をいひ下し或はのることば也和名乞児加多并列子云齊有貧者常乞於城市乞児曰天之辱莫過於是云々いせ物語も皆同じ□強てわけんとするは例のひか心なり語を直にいふと借りていやしめいふ語の用様をしらではいかで解得ん 魚彦云下総にて癩風病人をかたるといふすへて乞児におなし」此泊りの浜にはくさゝのうるはしきかひ石なとおほかりかゝればたゝ昔の人をのみこひつゝ船なる人のよめる「くさゝは種々也昔の人とは土佐にてうせし女兒也童は貝石なと愛する故に是を見ておもひ出たるなるへし」

よする波うちもよせなん我こふる人わすれがひおりて

ひろはん 「うちもよせなんとは忘貝を也万葉集いとまあら

はひろひにゆかんすみの江の岸によるてふ恋わすれかひ」

といへればある人たへすして舟の心やりによめる

わすれがひひろひしもせし白玉をこふるをだにもかた

みとおもはん

となんいへる「ひろひしもせじは拾ひますましきと也忘れはて

ゝはひたすらに名残もなかるへきなればせめて恋しと思ふ心をだにもかたみとせんと也白玉は海へなれはよせて我子をいへるなり万葉に億良大夫の白玉のわか子ふるひはとよみしも子をたとへたり」女ごのためには親をさなくなりぬへし「おもふかゆゑにはおとなしからず子をほめいふなり」玉ならすもありけんをと人いはんやされどもしゝがほよかりきといふやうもあり猶同し所に日をふることをなげきてある女のよめる哥、

手をひてゝさむさもしらぬいつみにぞくむとはなしに
ひころへにける「此いつみは国の名のみなれはくむとはなしにと云也さむさはさいはらにみもひも寒しと同」

(一)は今本になし

五日けふからくしていづみのなだより小津のとまりをおふ松原めもはるゝなりかれこれくるしければよめる「和名抄いつみ日根郡平於乎の郷有こゝか神武に五瀬命のみうせませし時たけひ給ひしによりて其所を雄水門と云と有」

ゆけどなほゆきやられぬはいもがうむをづの浦なる岸の松原「一本ゆきやられねは万葉卷十三をとめらをげのたれたるうみをなす長とのうらとも」

かくいひつゝくるほどに船とくこげ日のよきにともよほせばかちとり船子どもにいはいくみ船よりおほせたぶなりあさぎたの出こぬさきにつなではやひけ「おほせたふ也とは仰たまふとなり朝北は風の名也」此詞の哥のやうなるはかちとりのおのづからの詞なりかちとりはうつたへにわれ

哥のやうなる事云とにもあらず聞く人のあやしく哥めきてもいひつる哉とて書出せればげにもみそもし余り也けり「うつたへは万四さか木にも手はふるとふを打細に人きぬとへはふれぬ物かも卷五打妙に離の姿見まくほりゆかんといへや君を見にこそ万葉十(九丁)打細に鳥ははまねと是ら皆偏てふ意也さて細妙などの字をかりたればたへのかな也絶の意には非」けふ波なたちそと人々ひねもすにいのるしるしありて風波たゝずいしましかもめむれるてあそふ所あり京のちかづくよるこびの余りにあるわらはのよめる哥「今と云事を此文には今しといへり上にかたゝ有いましとは汝と云事也よりて乃字を書或人乃の字と云は誤」

いのりくる風間ともふをあやなくもかもめさへだにな
みと見るらん「あやなくは本物のわかちなきをいひてそを転してことわりなき事にいへり無益といひても聞ゆおもふをもふとのみ云は万葉に多し此比も猶いひけんさへだにいかんそやかくいへる事は古今にもなし」

といひてゆくあひだに石津と云所の松原おもしろくて浜べ遠し「和名抄和泉国大鳥郡石津郷あり」又すみのえのわたりをこぎゆくある人のよめる「すみよしと云事なし住吉と書てすみのえとこそよめ左に比哥にしかよめり詞には住吉と有つらんを後に誤るもの也」

今見てぞ身をもしりぬるすみの江の松よりさきにわれはへにけり「貫之の哥なるへし住吉の松はとしふる物とかねては思ひつるに今見れば我は古まされりと思はるゝよし也

貫之凡七十余なるへし古今序に高妙住の江の松もあひおいのやうにおほし云々同集我見ても久しく成ぬ云々」

こゝにむかしへ人の母ひとひかた時も忘ねばよめる

すみの江に船さしよせて忘草しるしありやとつみてゆくべく

となん「毛詩注譚草食之令人忘憂万葉忘草を萱草と書て物忘れするよしによめり」うつたへに忘れなんとにはあらで恋しきこゝちしばしやすめて又もこふる力にせんとなるへし「かくいへはとて偏に忘れ果んとはあらす余り恋ふるに心もくづはれぬへければしはし忘れて心ちをやすめて猶恋んと也此母の終に忘るましきと云心なるへし」かくいひてながめつゝくるあひだにゆくりなく風吹てこげどもくしりへしぞぎにしぞきてほどくしくうちはめつべし「ながめは是も上より見れば物思ひつゝ来る也ゆくりなくとは不意也紀訓俄に心ならざる風の吹出し也しりへしぞぎは舟のあとしりぞぎに退たる也ほとくしくは万葉集又後にも宮作るひたのたくみのてをの音のほとくしかるめを見しかな殆をよみたるよく叶へり殆は危也近也云々」かちとりのいはく此住の吉のめう神はれいの神ぞかしほしきものぞおはすらんとはいまめくものか「明神は万葉にあきつ神とよみて顕神と書に同しく今世におはします天皇を申事也神を明神と云事延喜式の比迄はなし貫之の明神と書ましき事知へし名神と有しを後に明神と書しならん又名をかなにてめうと書しを明の事と思ひて書誤れるにも有へし式に名神と有は名有神の事也れいのかみとは例也いつもほしき物おはする時はかゝ

る波風おこし給ふと也いまめくものかとは神も今の世めて物ほしみし給ふかと云也住吉大神は伊弉諾尊の日向の橘の憶原にてみそぎし給へる時になり出給ふ底筒男命中筒男命表筒男命也其後神功皇后をもいはひて住吉四所の大神と云是也」さてぬさをたいまつり給へと云いふにしたかひてぬさたいまつるかくだいまつれどももはら風やまでいや吹にいやたちに風波のあやふければかちとり又いはくぬさには御心のいかねば御船もゆかぬ也猶うれしと思ひたぶべき物たいまつりたべといふ又云にしたがひていかはせんとてもまなこもこそふたつあれたゝ一つある鏡をたいまつるとて海に打はめつればいと口をしされは打つけに海は鏡の面のごとなりぬればある人のよめる哥

ちはやぶる神の心(6)をあるゝ海に鏡を入てかつみつるかな「古事記に鏡は天照大神の御形を残し給ふと云より鏡を御神の心と云へしかつは鏡を海に入るやいなやかつ神の御心も見たるよし也」

いたくすみの江(7)わすれ草岸の姫松なと云神にはあらすかし「此いたくはあらすかしと云にへたてゝつゝきて痛をいたくともいとゝもいとまかしこしと云いと也さていたく此例あらし給ふ神は住の江の岸の姫松なといひあへるか如き大かたなる神にはあらずと云なるへし草木も即神とする上古の意によれりと見ゆ」めもうつらく鏡に神の心をこそは見つれ「目もうつらくとは目の頸に也目の前を見るを云」かちとりの心は神の御心

也⁽⁸⁾けり

(1) 哥今本なし (2) て今本 (3) 一本なし (4) も今本なし (5) 面今本なし (6) 今本の (7) の一本 (8) けり今本なし

(イ) 万葉卷四(五十七丁) 打妙爾前垣乃酢堅欲見将行常云哉君乎見爾許曾 (ロ) 鎌倉右大臣の集の終に物いはぬよものけた物すらたにもあはれなるかな親の子をおもふとよみ給へるすらたにもこゝとひとしく誤給へり (ハ) 魚彦追考明神といふ事嘉祥の比(仁明御時) 既在と見えて続日本後紀卷十八に山城国乙訓郡山崎明神に御戸代田二丁を奉又同卷隠岐国伊勢命神預明神例とあれば明神とは早くいひける也

六日みをづくし⁽¹⁾のもとより出てなには⁽²⁾の津をきて川じりにいる「漂漂の事続紀にあり」皆人々おむな翁ひたひに手をあて、悦事^{よろこぶ}二つなし「嬭翁也さならてはこゝの詞聞えず」かの舟酔のあはちの嶋のおほいこ都近くなりぬと云を悦て船底より頭^{かしら}をもたげてかくぞいへる「あはちの嶋のおほいこは前にあはちのたうめと云し人の名にや又たうめひとり心ちあしみてと前に有し故に彼舟酔のとは云なるへし」

いつしかといふせかりつるなにはかたあしこきそけてみ船きにけり「昔間のいふせきをそへたりこきそけては芦の中を漕さりのきてなり」

いと思ひの外なる人のいへれば人々あやしがる「船酔にふしたるおほいこの哥よまんとは思さりし也」是か中に心ちなやむ船君いたくめで、船酔したうべりしみ顔にはにすもあ

る哉といひける

(1) ほと今本 (2) の今本なし (3) 妙本淡路 (4) 妙本巨子 (5) 妙芦 (6) 漕 (7) 避

七日けふ川じりに船入たちて漕のほるに川の水ひてなやみわづらふ舟の登る事いとかたしかゝるあひだに船君の病者もとよりこちへしき人にてかうやうのことさらにしらざりけり「なやみわづらふは舟の行なやむ也こちへしきは骨々なり物に氣もつかすきすくなる心なり」かゝれどもあはちのたうめの哥にめで、都ぼこりにもやあらんからくしてあやしき哥ひねり出せり其哥「京へ近づきし事をよろこひほこるなり」

きと来ては川の堀江の水を浅み船も我身もなつむけふ哉「海路のほと風波をしのきてやう／＼にきては又川水の浅き事をこめたる五文字也川のほり江は難波の堀江なるへし吾身もなつむは病者の心也」

是は病をすればよめる成へし一哥に事のあかねは今一つとくと思ふ船なやますは我ために水の心の浅きなるへし

此哥は都近く成ぬるよろこびにたへすしていへる成へしあはちのこの哥におとれりねたきいはざらまし物をとくやしがるうちによるに成てねにけり「あはちのごは伊せのご出羽^{イデハ}のこうちふしのごなと云類にて女をあかめて云也」

八日猶川のほとりになづみてとりかひのみまきと云所に

とどまる「とりかひのみまきは撰津国也今は鳥飼とかくなり」こよひ船君例の病おこりていたくなやむある人あざらかなる物もてきたりよねしてかへり事す「あざらかなるは鮮魚也」男共ひそかに云也飯^{いひ}ぼしてもつるとやかうやうの事所々に有「あさらけき魚をもてこしに米をやりたれば飯つぼしても魚をつるといへる也つゝとあるは字の誤也飯^{いひ}ぼは飯一つぶ也田舎人は一つぶを一つぼと云古意也けり」けふせちみすればいをもちぬす

(1)の今本なし (2)都へ也 (3)妙本鳥養 (4)御牧 (5)今本つゝと有は(誤)

九日心もとなさにあけぬ「心もとなさのみにて明ぬると云也」⁽¹⁾かう船を引つゝのほれ共川の水なければるざりにのみそ⁽²⁾るさる此間^{あひだ}にわたのとまりのあがれの所と云所ありよねいをなどこへばおこなひつ「妙寿本米魚なと乞へは贈つあがれの所とは道行人の行別るちまたなるへし一本贖の所とはあかれあかな仮字似たるを見まかひて書誤るにや米魚^{アキナ}なと商ふ所と云にて聞ゆおこなひつとは其云やりし要事をなし行ふと云事なれば贈つと云と同意也」かくて船引のぼるに渚^{なみだ}の院と云所を見つゝゆく其院昔をおもひやりて見れはおもしろかりける所也しりへなる岡には松の木ども有中の庭には梅の花さけり「渚の院河内の園也いま枚方^{ヒラタ}といふところの北なり」こゝに人々のいはく是は昔名高く聞えたる所也故^{ゆゑ}これたかのみこの御ともに故在原の業平の中將の世の中に絶て桜のさかざらは春の心はのどけからましと云哥よめる所也け

り「惟喬親王は文徳第一皇子母紀靜子名虎女業平元慶元年正月十五日任左近中將古今集なききの院にて桜を見てよめる在原業平朝臣よの中にたえてさくら⁽³⁾のなかりせは云々三の句こゝと異」今興ある人所に似たる哥よめり「似合たる也」

ちよへたる松にはあれど古への声のさむさはかはらさりけり「しりへなる岡に松の木ともありといへる松也声の寒さはさひしくすこき意にてふりにし所のさまなり」

又ある人のよめる

君こひて世をふる宿の梅の花昔のかにそなほにほひける「是も中の庭には梅の花さけりといへる只今のけしき也さて君とは惟喬のみこを此宿にてはこひ奉るへきことわり也されと君は立も帰り給はぬを梅は昔かはらすにほふとなるへし」

と云つゝぞ都の近づくを悦つゝのほるかくのほる人々の中に京より下りし時に皆人子どもなかりきいたれりし国にてぞ子うめるものどもありあへる人皆船のとまる所に子をいだきつゝおりのぼりす是を見て昔の子の母悲^{かな}しきに堪すして

なかりしもありつゝかへる人の子を有しもなくてくるがかなしき⁽⁴⁾

といひてぞなきける父も是を聞いていかゞあらんかうやうのこと哥好⁽⁵⁾むとてあるにしもあらざるべし「哥よむ事のあるにてもなしと云也」唐^{もろこし}もこゝも思ふ事にたへぬ時のわざ

とかこよひ宇土野と云所にとまる「津の国也今は鵜殿とかけり」

- (1) 今本からと有は(誤也如是也) (2) そ今本になし
(3) 今本みな人 (4) さ (5) 今本ことも哥も(あし) (6) し今本なし

(イ) 契沖云心もとなさにあけぬから□船を引のほれと□とよ□□またあけぬよりにて夜をこめて舟を引のほれる也貫之集に藤の花咲ぬるを見てほとゝきすまたなかぬからまたるへらなり (ロ) 魚彦云万六ノ四十一丁一ッ松幾代可歴流吹

風乃声之清スメル者年深香聞

十日さはる事有てのぼらす

十一日雨いさゝかふりてやみぬかくてさしのぼるにひんがしの方に山のよこをれるを見て人にとへばやはたの宮と云是を聞て悦(イ)て人々をがみ奉る「山のよこをれるとは山の形の横たはれる也古今によこをりふせるとよめるに同じ豊前国宇佐宮よりこゝに移し奉りけり」山崎の橋見ゆ嬉うれき事限かぎりなし「拾芥抄大橋部に山崎今大渡敷板数延喜式に有」ここに相応寺のほとりにしばし船をとめてとかく定さだる事有此寺の岸のほとりに柳おほく有ある人此柳の影の川の底に移マれるを見てよめる哥「相応寺の事三代実録にくはし略之」

さざれ波よする綾をは青柳の影の糸しておるかとお見(3)る「万葉にさざれ波は小波と書たり今本見ゆとあるはあし」

十二日山崎にとまれり

十三日猶山崎に「今案山崎にありか上のありこゝに有しなら

ん」

十四日雨ふるけふ車京へ取にやる「昔は西国に行人も京に来る人も山崎より船にのり上りせしよし古今大和物語などに有」

十五日けふ車ゐてきたれり船のむつかしさに船より人の家にうつる此人の家悦べるやうにてあるじしたり「船にも猶在へけれとむつかしきにと也むつかしとはむさくせし事もあるしは饗也」此あるじの又あるじのよきを見るにうたおもほゆ色々にかへり事す「又あるしとは其家の第などの事をいふへし」家の人の出入にくげならすい(6)やゝか也「あやゝかとはうやくしきなり」

- (1) よろこひて今本なし (2) の今本なし (3) 今ゆ
(4) 今本山崎にあり (5) 今本きたり (6) る
(イ) うたては有か上に□のかさなる様の事にも□□に違ひかさなる事をも云こゝは余りなるまでの意にて上に云に同じくであるしのよきにその第などのよく物おこなふをかく迄はいかてかさねくよきといふ也次の家人までよきと云にてもしれ(此注下に入へし)

十六日けふようさつ方都へのぼるついでに見れば山崎のこひつのもまがりのおほちのかたもかはらさりけり人の心をぞしらぬと云なる「まかりは饗餅マカリにや和名云饗餅形如藤葛者也和名万加利」かくて京へいくに嶋坂にて人あるししたり「嶋坂向日明神の南に在山崎の道也」かならずしもあるまじきわざ也「是は人の心のうすきを云詞にて先かくいひて次に其ことわりをいふなり」たちて行し時よりはくる時ぞ

人はとかくありける是にもかへりこととするになして都
には入らんと思へはいそぎしもせぬ程に月出ぬ桂川月の
あかきにぞ渡る人々のいはく此川あすか川にあらねはふ
ちせさらにかはらざりけりといひてある人のよめる哥

久方の月におひたる桂川そこなる影もかはらざりけり
〔古今集いせ桂に住ける時云々久かたの中におひたる里なれ
は光をのみそたのむへらなる〕

又ある人のいへる

天雲のはるかなりつる桂川袖をひてゝもわたりぬる哉
〔あま雲はとていひ下したれば右の哥をもて月のかつら川の
はるか成し□□いふ也〕

又ある人よめり

かつら川吾心にもかよはねど同しふかさになかるべら
なり〔昔と同じきにあらず今深く悦ぶ我心と同し深さと也こ
ゝ我心の深きをいはんよしなし京に來たる悦の深きをたとふ
る成へし〕

都の嬉しき余りに哥も余りそおほかる夜ふけてくれは所
々も見えず京に入たちてうれし家に至りて門にいるに月
あかけれはいとよくありさま見ゆ聞しよりもまして云か
ひなくそこぼれやふれたる〔長明無名抄に或人のいはく貫之
か年比住ける家の跡は勘解由小路よりは北富小路の東の角也と〕
家をあつたりつる人の心もあれたる也けり中垣こそあ
れ一つ家のやうなれば望て預かれる也されは便りことに
ものもたえすえさせたりこよひかゝる事とこわたかに物

もいはせず〔貫之の内の者ととも荒たるよしさのみもいはせぬ
なり〕いとつらく見ゆれど心さしはせんとすさて池めいて
くほまり水つける所有ほとりに松もありき五とせ六とせ
に千年や過にけんかたえはなく也にけり今おひたるそま
しれるおほかたみなあれにたればあはれとそ人々いふ
〔たけくまの松は此度跡もなしちとせをへてやわれは來にけん〕
思ひ出ぬ事なく恋しきかうちに此家にて生れし女子の諸
共にかへらねはいかゝはかなしき船人のみな子いたきて
のゝしるかゝるうちになほ悲しきにたへすしてひそかに
心しれる人といへりける哥

生れしもかへらぬものをわか宿に小松のあるを見るか
悲しさ

とそいへる猶あかすやあらん又かくなん
見し人を松のちとせに見ましかはとほくかなしきわか
れせましや〔遠き別は死を云〕

わすれかたにくちをしきことおほかれどえつくさすとま
れかうまれとくやりてん

(1) 一本たなゝひ (いかゝ) (2) 妙寿本ほらの (3)
うり妙うる (4) イかへる (5) 妙本是にもそれにも

(6) 夜 (7) 山崎より羅城門の大路へ来るにかつら川を
わたる (8) イも (9) 今本くれはなし (10) 今本い

とは (11) の内 (12) 今の (あしゝ) (13) ども

(14) 今たかり (15) 妙み (16) の今

(イ) こひつ云々は山崎の寺などにある古筆の絵有しかまか

りのおほちの形は饅餅の大餅と云かうり人は饅餅にのみかけ
てもよし又小櫃を作て絵かき色記てそこにうるにても有へし
又或説庭訓に伏兔曲煎餅云々関東に餅をまかりと云山崎より
ほらの貝の形なる餅を油あけにして京へ出す東寺にて稻荷祭
の時是を供す又此抄といふものに異本にほらのかたとは法螺
にや今もほらかひのなりせし餅有といへり

明

□和八年卯神無月廿五日草写了 魚彦